津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集

茶山古墳群

1989.1
津山市教育委員会

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集

茶山古墳群

1989.1

津山市教育委員会

序

茶山古墳群は前方後円墳と円墳とからなる古墳群であります。津山市瓜生原に立地しており、その周辺は津山市内において最も古墳の密集する地域の１つであります。その中においても、茶山１号墳は最小規模の前方後円墳であり、全長は約20ｍにしか及びません。しかし、その小さな墳丘の中には５つもの主体部をもっており、現在まで「１人墓」と考えられていたことにわずかな疑問を提示することができました。出土遺物も鉄製大刀をはじめ、数多くの重要資料が発見されました。このことは遺跡の重要性はその大きさで決まるものではないこと、いわゆる「金ピカ物」をもって重要性を計ってしまう現代への警鐘ともなるものであります。

岡山県内においては開発を前提にする前方後円墳の発掘調査は初めてのことであり、津山市教育委員会としても慎重に対応いたしました。常に開発と文化財保護は表裏一体の関係にあり、古いながらも新しい大問題であります。結局、国庫と県の補助金を得て発掘調査の実施に踏み切りましたが、それに見合う十分な結果が挙げられたものと確信いたしております。

本報告書はその茶山古墳群の発掘調査の記録であります。各位のご活用をいただければ幸いでございます。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書完成までご協力いただきました土地所有者並びに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成元年　1　月　31　日

津山市教育委員会

教育長　福　島　祐　一

例　　言

1. 本書は津山市教育委員会が、国・県の補助金を得て実施した茶山古墳群緊急発掘調査の報告書である。
1. 発掘調査は昭和63年５月23日から８月13日にかけて、津山市教育委員会文化課職員保田義治が担当して行った。
1. 本書に使用したレベルは海抜高である。また、方位は平面直角座標系第Ｖ系の北である。
1. 本書第２図に使用した「茶山古墳群周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行２万５千分の１を複製したものである。
1. 本書では原則として敬称を省略した。ご容赦願いたい。
1. 本書の執筆・編集は保田が担当した。
1. 遺物整理には田中久美の協力を得た。また、発掘調査にあたっては津山市教育委員会文化課主事行田裕美、埋蔵文化財調査員木村祐子の協力を得た。
1. 出土遺物・図面・写真は津山市教育委員会二宮埋蔵文化財整理事務所に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　立地と周辺遺跡 …… 1
　1　位置と立地 …… 1
　2　周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ　調査経過 …… 2
　1　調査に至る経過 …… 2
　2　調査経過 …… 3
　3　調査体制 …… 3
Ⅲ　調査の記録 …… 5
　1　１号墳 …… 5
　2　２号墳 …… 15
　3　弥生時代の遺構・遺物 …… 17
　4　中世以降の遺構・遺物 …… 20
Ⅳ　まとめ …… 22
　1　茶山古墳群の築造時期 …… 22
　2　津山の前方後円墳 …… 23

挿　図　目　次

第１図　茶山古墳群位置図 …… 1
第２図　茶山古墳群と周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000） …… 2
第３図　茶山古墳群地形測量図（Ｓ＝１：200） …… 4
第４図　茶山古墳群配置図（Ｓ＝１：200） …… 6
第５図　茶山１・２号墳墳丘断面図（Ｓ＝１：80） …… 7
第６図　茶山１号墳中心主体図（Ｓ＝１：80） …… 8
第７図　茶山１号墳第２主体図（Ｓ＝１：40） …… 9
第８図　茶山１号墳第３主体図（Ｓ＝１：40） …… 10
第９図　茶山１号墳第４主体図（Ｓ＝１：40） …… 11
第10図　茶山１号墳第５主体図（Ｓ＝１：40） …… 12
第11図　茶山１号墳２～５主体出土土器（Ｓ＝１：３） …… 13
第12図　茶山１号墳出土遺物(１～13；Ｓ＝１：３、14～16；Ｓ＝１：４、17；Ｓ＝１：８) 14
第13図　茶山２号墳中心主体図（Ｓ＝１：40） …… 16

第14図　住居状遺構平・断面図（S＝1：80）…… 17
第15図　住居状遺構出土土器（S＝1：4）…… 18
第16図　弥生土器と石器（土器；S＝1：4、石器；S＝1：3）…… 19
第17図　中世以降の遺物（1～20・24～31；S＝1：3、21～23；S＝1：4）…… 21

図　版　目　次

図版1— 1 調査前遠景（北から）
2 調査前遠景（西から）

図版2— 1 調査前状況（南から）
2 表土除去後（南から）

図版3— 1 完掘状況（空中写真）
2 1号墳中心主体（西から）

図版4— 1 1号墳第2・3主体（南から）
2 1号墳第4主体（北から）

図版5— 1 1号墳第5主体（西から）
2 2号墳中心主体（西から）
3 1号墳土層断面図（南から）

図版6— 1 住居状遺構（南から）
2 出土弥生土器（第15図6）
3 出土石器（第16図14・15）

図版7— 1号墳2～5主体出土土器

図版8— 左　古墳出土遺物
右　中世・近世の遺物

Ⅰ　立地と周辺遺跡

1　位置と立地　（第１図）

茶山古墳群は岡山県津山市瓜生原 650 － 3 他に位置する。

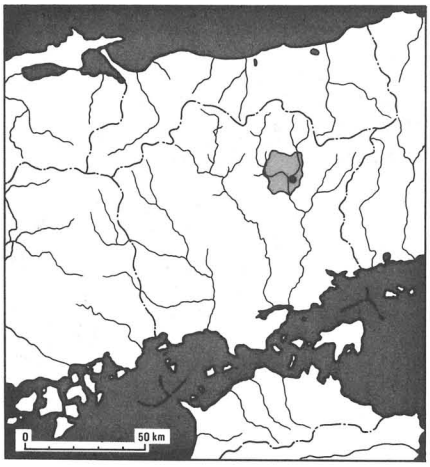
津山市は中国山地の中の小盆地にある。その北側の上斎原村に端を発した岡山県の三大河川の１つ吉井川は、津山盆地に入ると東に進路を変え、支流の加茂川に合流すると再び南下してゆく。その屈曲部の東側に盆地の側壁部を形成している和気山がある。そこから北へ向かって幾本もの尾根が派生するが、茶山古墳群はそのうちの最も西側の尾根の先端部に立地する。平野部との比高差は10～15ｍを測り、その先端はかなり急峻に落ち、河岸が形成したと思われる谷部へと沈んでゆく。

2　周辺の遺跡　（第２図）

茶山古墳群の周辺は、弥生時代中期から後期にかけての集落の密集地域である。

茶山古墳群の正面の丘陵には西吉田遺跡、東側には一貫東遺跡、一貫西遺跡と弥生時代中期後半から後期前半の集落が尾根上もしくは斜面部に併存する。南西側の尾根には大畑遺跡、小原遺跡と弥生時代後期の中規模集落が存在し、南から南東部にかけては別所谷遺跡、深田河内遺跡、金井別所遺跡、崩レ塚遺跡等の弥生時代中期の遺跡が認められている。いずれも和気山から北へ派生する尾根の頂部もしくは斜面部に立地するものである。また、弥生時代中期と後期の集落はそれぞれ丘陵を別にし、同一丘陵上に２時期のものが複合しないのも特徴である。

古墳時代になると当該地域は最も重要なものとなる。すなわち、津山市最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基より構成される古式の群集墳日上畝山古墳群が同一丘陵上に立地する。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、正に当該地が津山盆地の玄関口にあたるということに関係するものかもしれない。また、古墳時代後期になると、美作でかなり普遍的に認められる陶棺古墳が増大する。クズレ塚古墳の様に石室長９ｍ以上を測るものもみられる。更に、柳谷古墳や天神原１号墳の様に銀象嵌もしくは金銅装の刀装具を持つ古墳



第１図　茶山古墳群位置図

もみつかっており、これらのことから、当該地域が古墳時代全般を通じて重要性を保ってきていたものと考えられる。

その後、和銅６（713）年、当地に美作国が設置された。国府は約５㎞西北に造営されたが、国分寺・国分尼寺は当該地区に造営されており、この一種異例とも見える現象は今後更に前史との関係から再検討を要するものである。

Ⅱ　調査の経過

1　調査に至る経過

昭和62年８月初旬、津山市瓜生原茶山古墳群　（前方後円墳１基、円墳１基）の存在する丘陵で、同地区の水田構造改善事業用土として採土計画のあることが判明。この土取り工事により古墳群が破壊される恐れが強かったため、即刻津山市産業部構造改善課に古墳保存のため業者指導を依頼。土取り計画を変更、土地所有者に古墳保存を要請し古墳範囲を明示した。

しかし、これ以降も土取り工事は進行し、前方後円墳北端部にせまり、切り立った崖の上に古墳が位置して、常時破壊の危険にさらされる状態となった。このため、これら古墳群の取り扱いについて岡山県教育委員会文化課と協議。昭和63年度に国庫補助金を得て、津山市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

昭和63年４月11日付で、地権者山本孫四郎氏より文化財保護法第57条の２の規定に基づく発掘届が提出され、同５月20日付で同法第98条の２に基づく発掘通知を津山市教育委員会教育長名で文化庁長室宛提出した。

調査に先だち、昭和63年５月20日付で地権者山本孫四郎氏と「津山市瓜生原茶山古墳群に係る文化財保護に関する覚書」を教育長名で取り結び、発掘調査に着手した。

1	茶山古墳群	a	日上畝山古墳群
2	日上天王山古墳	b	西吉田遺跡
3	和田古墳	c	一貫西遺跡
4	長畝山古墳群	d	一貫東遺跡
5	西吉田１号墳	e	深田河内遺跡
6	一貫西１号墳	f	別所谷遺跡
7	一貫東１号墳	g	金井別所遺跡
8	金井古墳群	h	崩レ塚遺跡
9	柳谷古墳	i	大畑遺跡
10	クズレ塚古墳	j	小原遺跡
11	クズレ塚古墳群	k	美作国分尼寺
12	植木古墳群	l	美作国分寺
13	隠里古墳群		

第２図　茶山古墳群と周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝１：50,000）

2　調査の経過

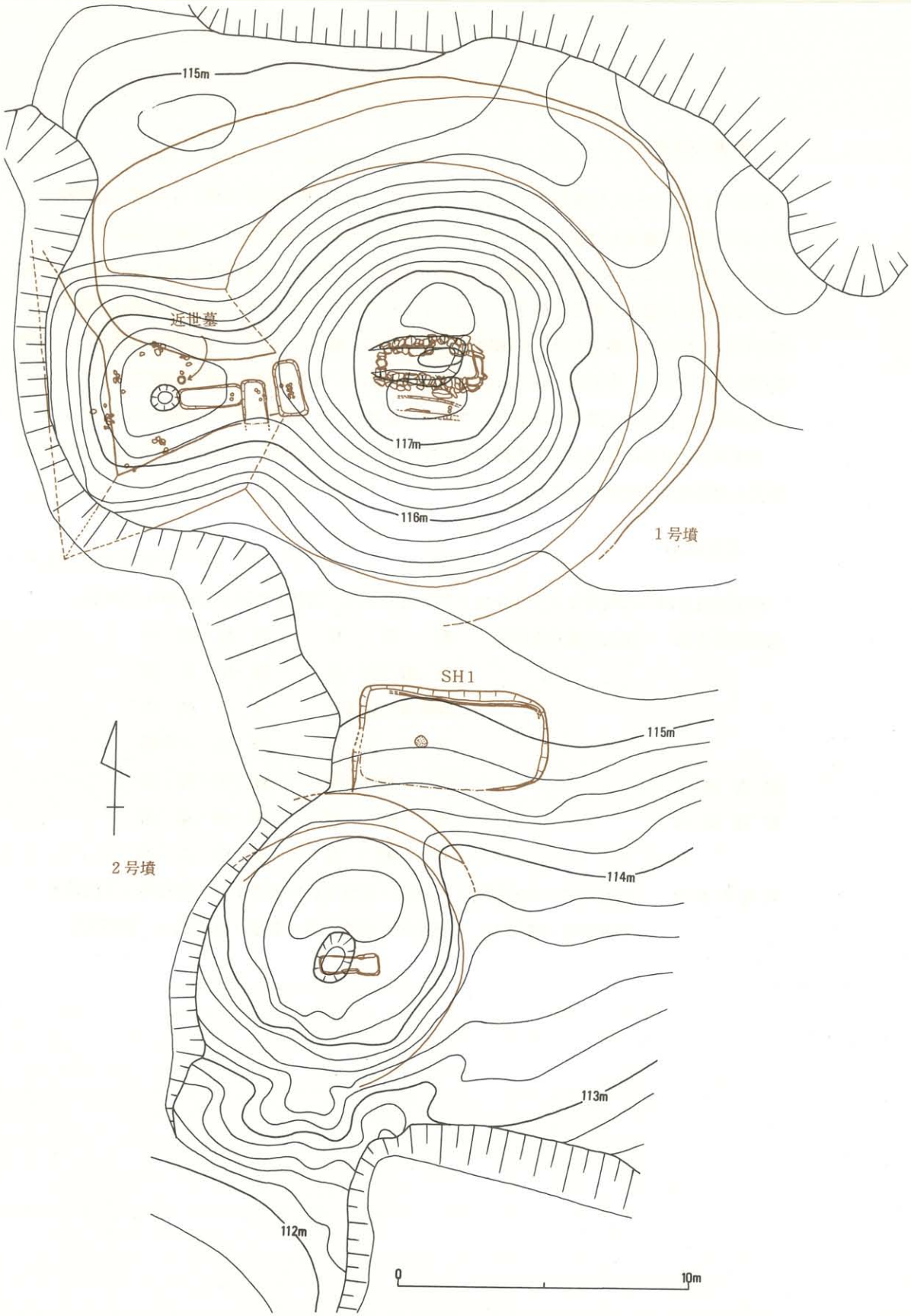
昭和63年５月23日に発掘調査を開始した。清掃・全体写真を撮影の後、１号墳の前方部から表土剥ぎ及び周溝埋土の除去を行った。６月15日からは２号墳に移り、23日には終了した。６月27日から１号墳の中心主体の調査にかかり、９日には第２・３主体を検出している。19日までには両古墳の墳丘の整形も終了し、20日には小型ヘリコプターによる空中写真を撮影した。翌日の21日から墳丘盛土の除去を開始した。23日には地元の市民及び研究者を対象とした現地説明会を敢行した。その後、28日には１号墳第４主体、８月２日には第５主体を検出し、一方で両古墳間に弥生時代遺構の確認調査を行い、８月12日に発掘調査の全過程を終了した。

現地の調査指導には岡山大学近藤義郎教授、岡山理科大学鎌木義昌教授、岡山県文化財審議委員水内昌康氏の指導を受けた。

3　調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査主体は下記の通りである。

発掘調査主体	津山市教育委員会	教育長	福島祐一
		教育次長	藤田公男
		参事兼文化課長	須江尚志
		文化係長	籾山三千穂
調査担当		事務員	保田義治
整理担当		事務員	保田義治
		整理員	田中久美
発掘作業員	赤坂寅夫・赤松国幹・安藤猛・稲垣光男・稲谷正一・寒竹勝・下山政夫 竹内節雄・藤島喜一・藤島保・藤嶋律美・森康・森本惣一・龍門安三		



第３図　茶山古墳群地形測量図

Ⅲ　調査の記録

1　1号墳

調査前の状況

主軸を南北方向に向けた前方後円形の墳丘が確認できた。しかし、前方端部と南側コーナーが後世の畑地の造成により削平を受けていた。後円部と前方部の墳頂には盗掘坑があけられていた。周囲には溝を想定させるわずかな凹みが認められた。周辺からは土器・葺石等は検出されなかった。

墳丘の形態と規模　（第4図）

全長20.6m（推定）を測る前方後円墳である。後円部径は15m、前端部幅は11.4m（推定）、くびれ部幅は7.0 mを測る。現状での後円部高は平均2.1 m、前方部高は平均1.4 mを測る。前方後円墳の周囲には広い箇所で4.6 m、狭い箇所で1.3 mの浅い凹み状の周溝がめぐる。それは、南側では後円部のほぼ中頃で自然傾斜面に解消されており、前方部の北東コーナー付近で掘り残し、陸橋状に仕上げている。

墳丘の構造と築造　（第4・5図）

茶山1号墳の主軸はN－73°－Wを指す。丘陵の尾根線に対してほぼ直交する。

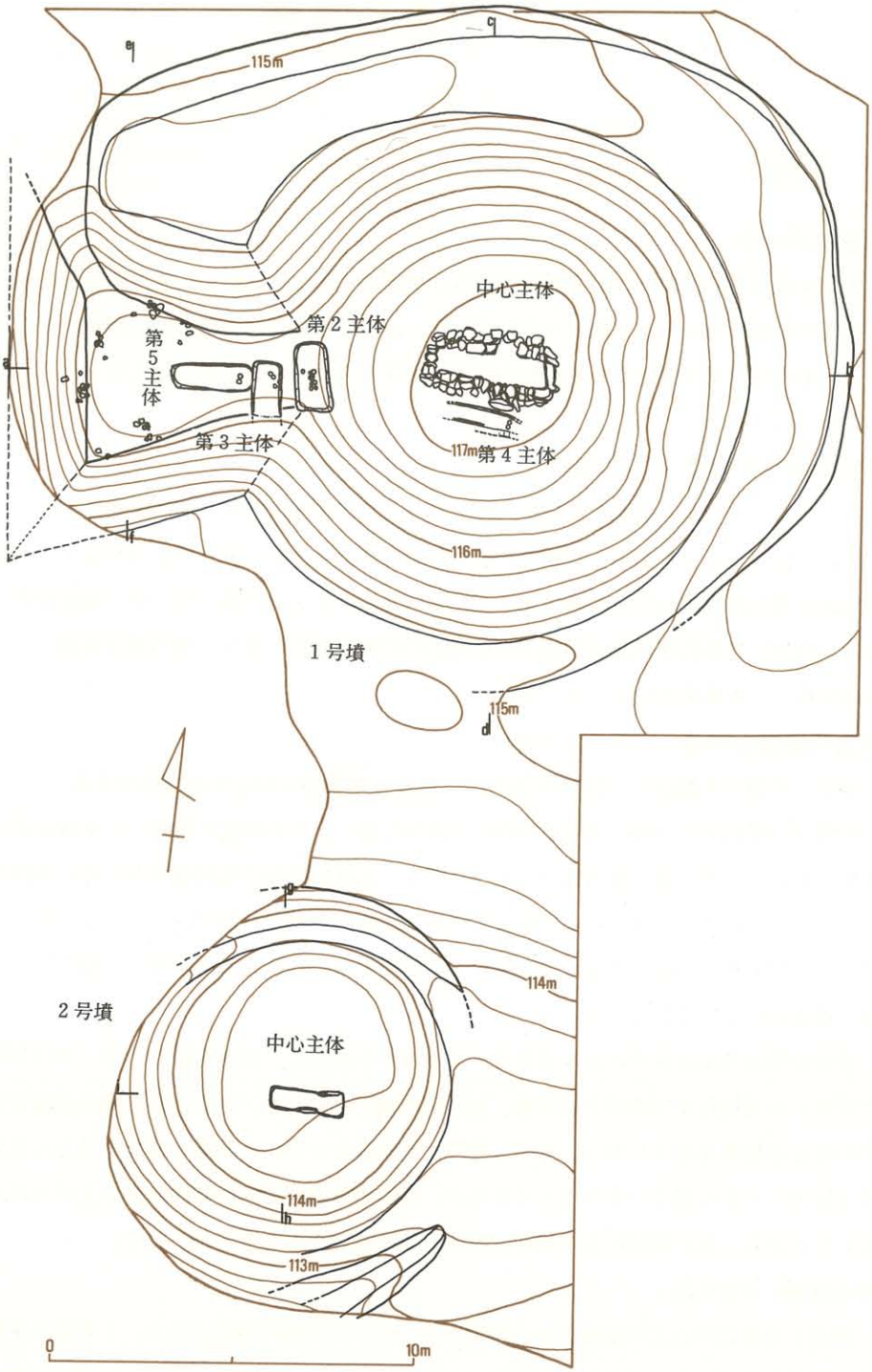
後円部の墳頂部には竪穴式石室の中心主体が位置し、その南側に隣接して木棺直葬の第4主体が位置する。前方部と後円部とのくびれ部で、古墳尾根部の傾斜変換点付近に木棺直葬の第2主体が、その西側に隣接して木棺直葬の第3主体がそれぞれ造営されている。第5主体は前方部のほぼ中央に古墳の主軸にほぼ平行して位置する。これも木棺直葬で、掘り方は墳丘築造前の地表面にまで達している。

墳丘の築造方法は次のとおりである。まず墳形を設定し、周囲を掘り下げ、後円部に盛り上げる。ある程度まで盛り上げた後、前方部の成形にかかる。あらかたの墳形が確定した後、中心主体の側壁を積みながら、全体を整形して完成させる。その際の盛土はほとんど周囲を掘り下げることから得ていると考えられるが、周溝の外側部分には明確な立ち上がりは認められないことから、広い範囲にまで周辺の整地が及んでいたものと考えられる。

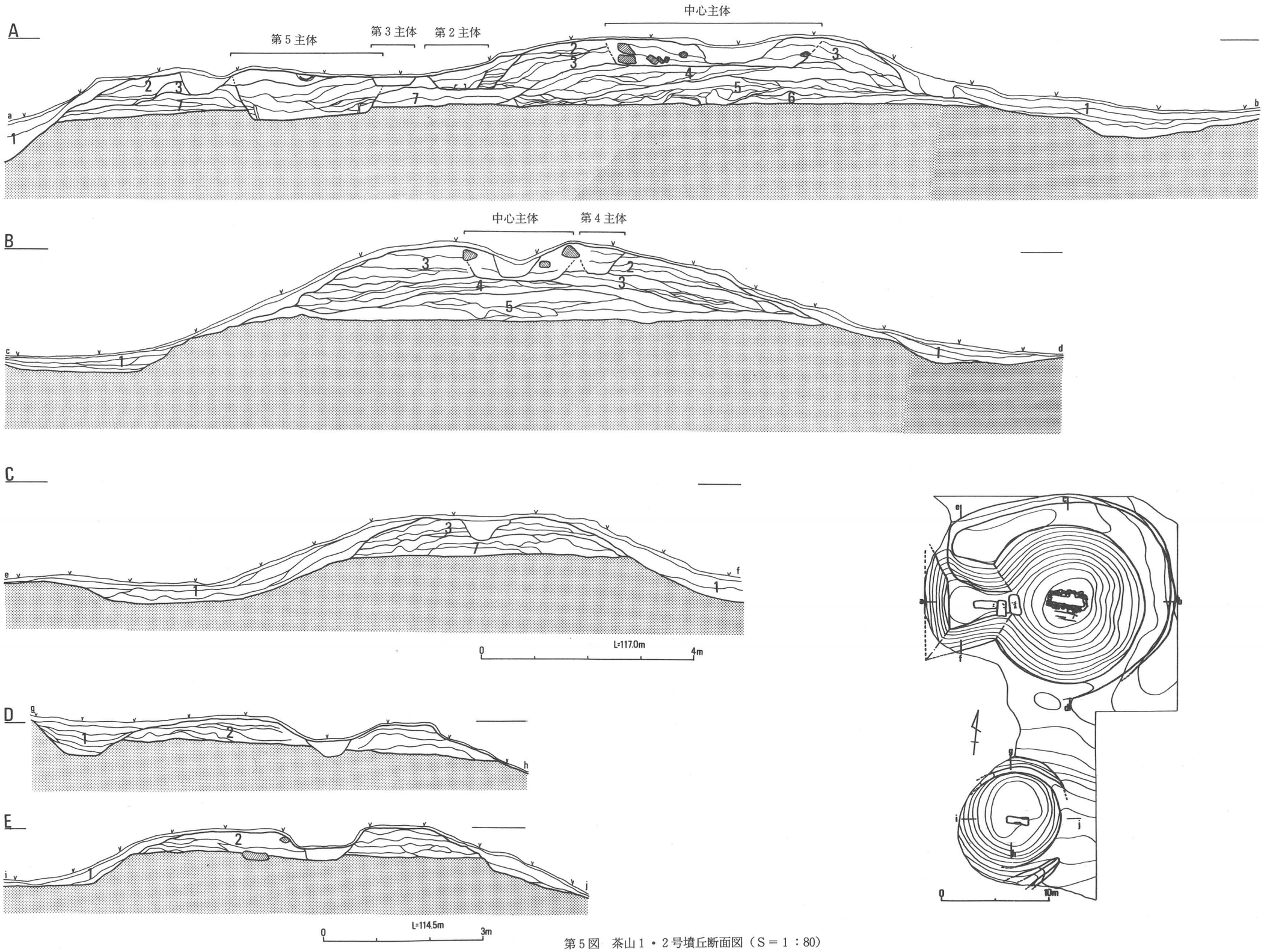
中心主体　（第6図）

茶山1号墳の中心主体は後円部の墳頂にN－85°－Wの軸で検出された。1号墳の主軸とは12°北へ振るものである。内法3.1×0.7 mを測る長方形に河原石で構えた竪穴式石室であり、各石は内側に面を揃える配慮がなされている。

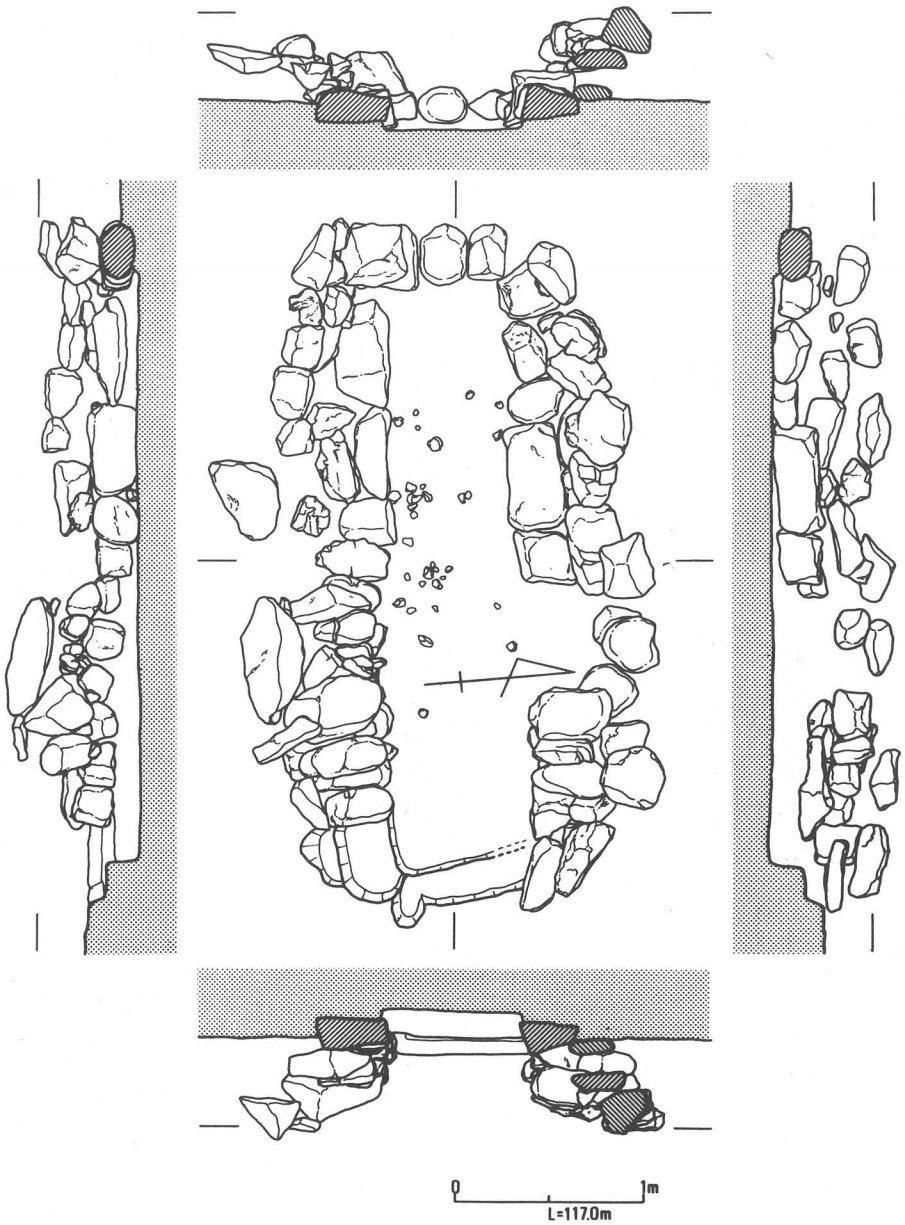
石室内部はすでに盗掘され、石室の基段の側壁石のみ遺存していた。東側ではその抜き取り



第4図　茶山古墳群配置図（S＝1：200）



第5図　茶山1・2号墳丘断面図（S＝1：80）

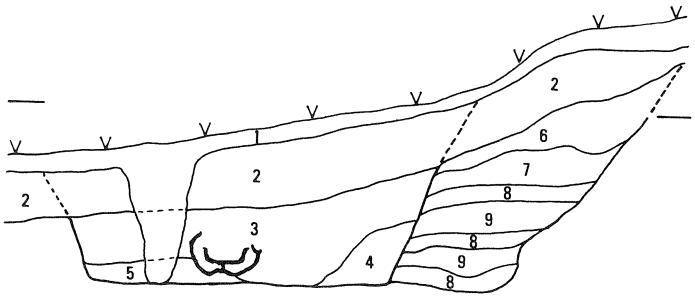


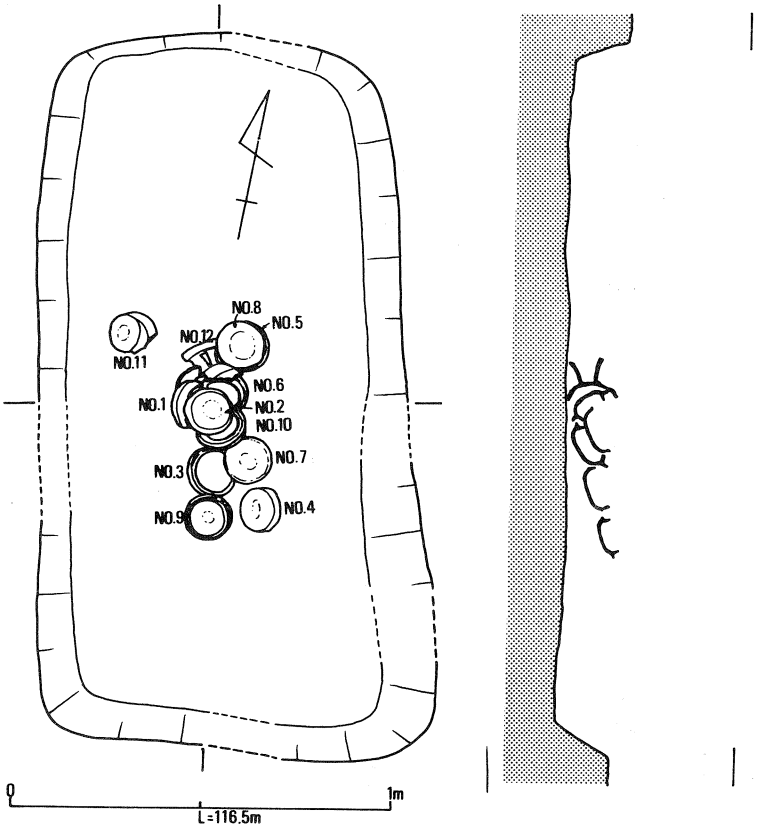
第６図　茶山１号墳中心主体図（Ｓ＝１：80）

坑が確認され、南側にその抜き取られたと考えられる石が埋土中より検出された。

床面はすでに撹乱を受けており、ほとんど施設及び遺物等は認められなかった。しかし、わずかに床面に残っていた小礫から、本来はこれが一面に敷かれていたものと考えられる。

石室の壁体石は基底部でのレベルを統一しておらず、石室内部の大きさだけ長方形に掘り凹め、周囲に石を積んでいったものと考えられる。





第７図　茶山１号墳第２主体図（Ｓ＝１：40）

掘り方で墳丘上面に達するものは検出できなかった。

遺物等の出土は床面上からは皆無であるが、埋土中より数個体の須恵器蓋杯片が検出されている。

以上の事実から中心主体の築造工程は次のとおり推定される。まず、墳丘の盛土を中心主体のやや上部にまで施し、規模を設定しその部分を長方形にやや掘り下げる。次に基底部の石をその外側に面を揃えて並べ、盛土で裏込めをしながらさらに上部の石を積んでゆく。天井石についてはその確かな証拠が認められず不明である。

第２主体　（第７図）

木棺直葬の土壙墓で、床面の規模は 1.8 × 0.8 ｍを測る。主軸はＮ－10°－Ｗをさし、１号墳の主軸とほぼ直交する。床面はほぼ水平に造られている。

土壙内から完形の須恵器が12点出土した。内訳は杯蓋５、杯身５、高杯１、𤮈 １である。その出土状況はほとんどが内側に倒れ込んでおり、土壙床面から浮いて出土していることから本来は棺内にではなく棺上に置かれていた可能性が指摘される。

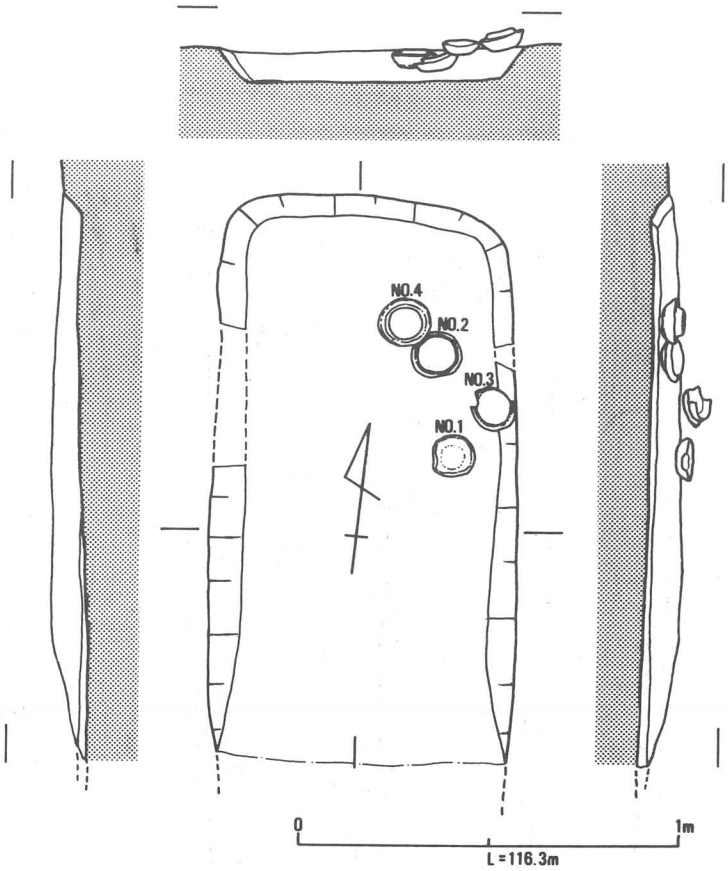
埋土には３・４・５層があるが、いずれも中央に向かって落ち込んだ状況が観察された。さらに土壙東側の外側に８・９の互層状の盛土層が断面で検出されたが、これが第２主体の掘り方埋土の可能性も指摘できる。

第３主体　（第８図）

本棺直葬の土壙墓で、南側の小口は墳丘斜面の盛土の自然流出により切られており、現状では床面の規模で1.5以上×0.7ｍを測る。主軸はＮ－6°－Ｗをさし、１号墳の主軸とはほぼ直交する。床面のレベルは水平である。

土壙の北東部からやや浮いた状態で須恵器の蓋杯４つが出土した。しかし、これも床面に直接着いていないことから、本来は棺内ではなく、棺上におかれていた可能性が指摘される。

№１の須恵器の下から赤色顔料がわずかながら検出された。



第８図　茶山１号墳第３主体図（Ｓ＝１：40）

埋土は淡黄褐色の単層である。

第４主体　（第９図）

本棺直葬の土壙墓で、1.7以上×0.4ｍを測る。主軸はＮ－85°－Ｗをさし、中心主体の主軸と平行である。床面のレベルはやや西側に向かって下がっている。

床面東側に２個の須恵器杯蓋が並べて伏せて置かれていた。また、南側壁体寄りで主軸に平行に鉄製直刀が出土した。刃部をやや斜め下に、背部を斜め上に向け、柄は西側に置かれていた。切先部分は盛土確認のトレンチ内より出土している。

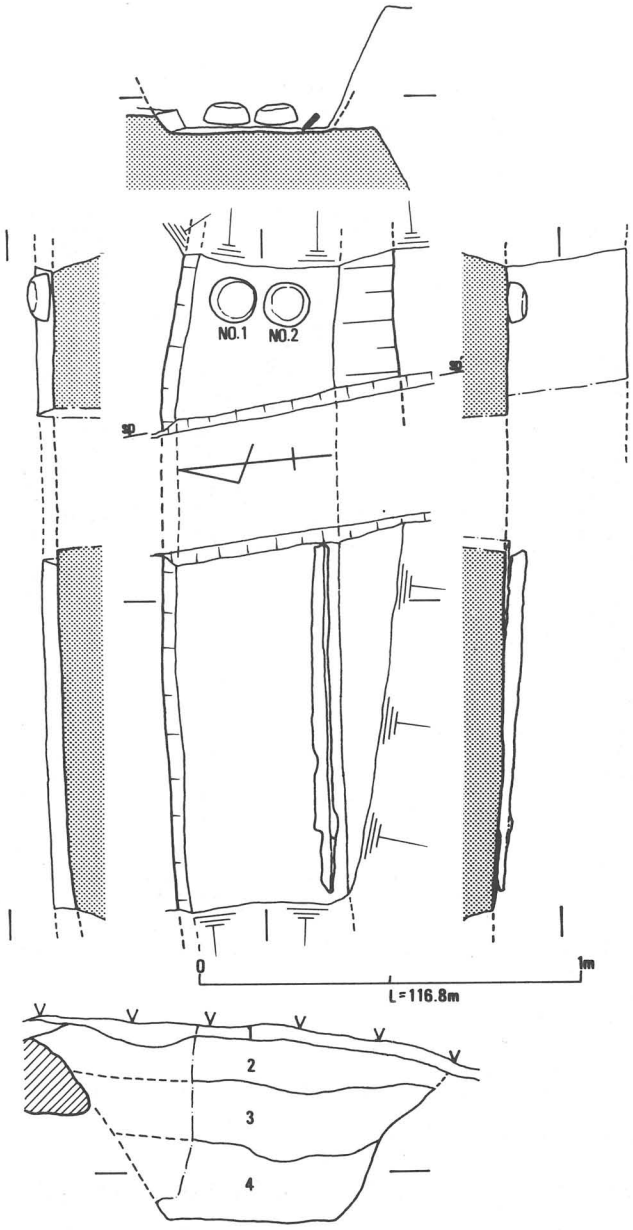
掘り込みは墳丘頂部より行われている。現状での深さは約0.5～0.6ｍを測る。

第５主体　（第10図）

木棺直葬の土壙墓で、2.2×0.7ｍのやや隅丸長方形に掘り込まれたものである。主軸はＮ－74°－Ｅをさし、１号墳の主軸とは8°程北へ振るが、ほぼ平行する。

土壙のほぼ中央部に1.8×0.4ｍを測る木棺痕跡が確認された。また床面のレベルは西側がやや低くなっている。

木棺痕跡の東側の床面上に須恵器杯蓋が２つ並んで伏せて置かれていた。



第９図　茶山１号墳第４主体図（Ｓ＝１：40）

棺内埋土層は３つに大別できる。４～９層は墓壙内埋土で、中央にやや落ち込んだ状況を呈している。10・11も基本的には墓壙内埋土であるが棺内流入土として捉えられるものである。13～15はやはり墓壙内埋土であるが、木棺を安置した後、掘り方との間隙を互層により充塡したものである。

第５主体の直上の表土層近くから須恵器甕形土器が一括出土しているが、第５主体との直接の関連は不明である。

第３主体との切り合い関係から、両者の築造順序は第５主体→第３主体であることが判明している。

１号墳出土遺物　（第11～12図）

茶山１号墳出土の遺物には須恵器と鉄器とがある。

第２主体（第11図**２－１～12**）からは須恵器杯蓋５、杯身５、瓶 １、高杯１が出土している。

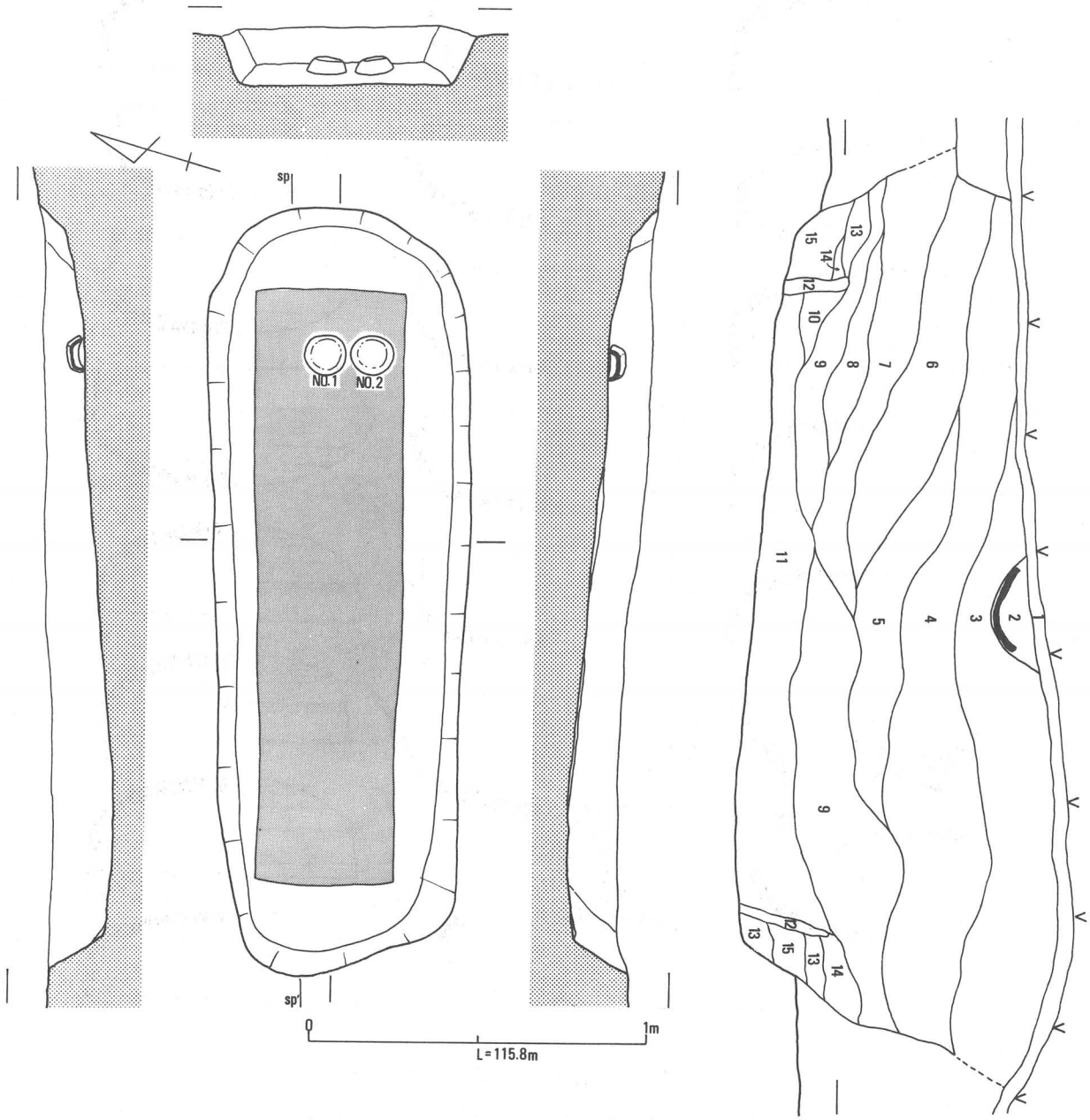
第３主体（第11図**３－１～４**）からは須恵器杯蓋１、杯身３が出土している。

第４主体（第11図**４－１・２**、第12図**17**）からは、須恵器杯蓋２と鉄製大刀が出土している。

第５主体（第11図**５－１・２**）からは須恵器杯蓋２が出土している。

中心主体埋土中からは数点の須恵器片（第12図**４・５**）が出土している。

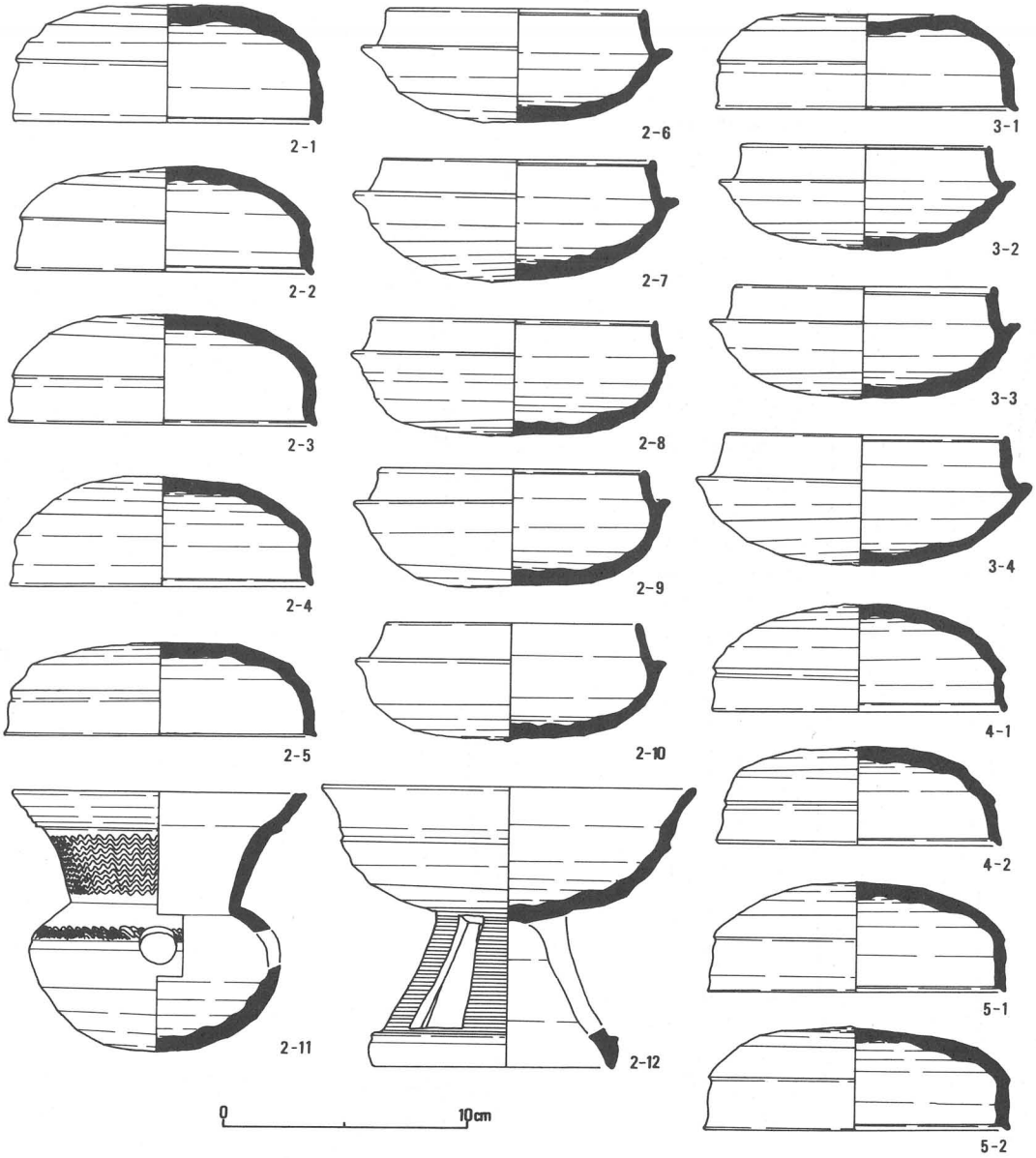
第12図**１～３**はいずれもほとんど完形で、くびれ部北側の周溝底附近より出土している。第12図**６～14**はいずれも小破片であるが、南側周溝内埋土中より出土しており、**13**が高杯脚部片、**14**が甕形土器の口縁部片である。第12図**15・16**はいずれも甕形土器であるが、前方部の頂部から出土している。特に**16**は底部が第５主体の上部に据えられた様に出土し、その中に口縁部片



第10図　茶山１号墳第５主体図（Ｓ＝１：40）

が陥こんでいた。

須恵器杯蓋は、口径 11.5 ～ 12.6 ㎝を測り、器高は比較的高いものである。口縁端部には内側に凹線様の段をもち、口縁部と天井部との屈曲部外面には凹線が認められるのが一般的である。また回転ヘラケズリはかなり低い部分にまでおりてきている。杯身は口径 10.2 ～ 11.4 ㎝と大きさにはばらつきが認められる。口縁端部の形態は第11図10の例外を除き端面内側に凹線様の段をもつものが一般的である。しかし、受け部と立ち上がり部の形態についてはまちまちであ

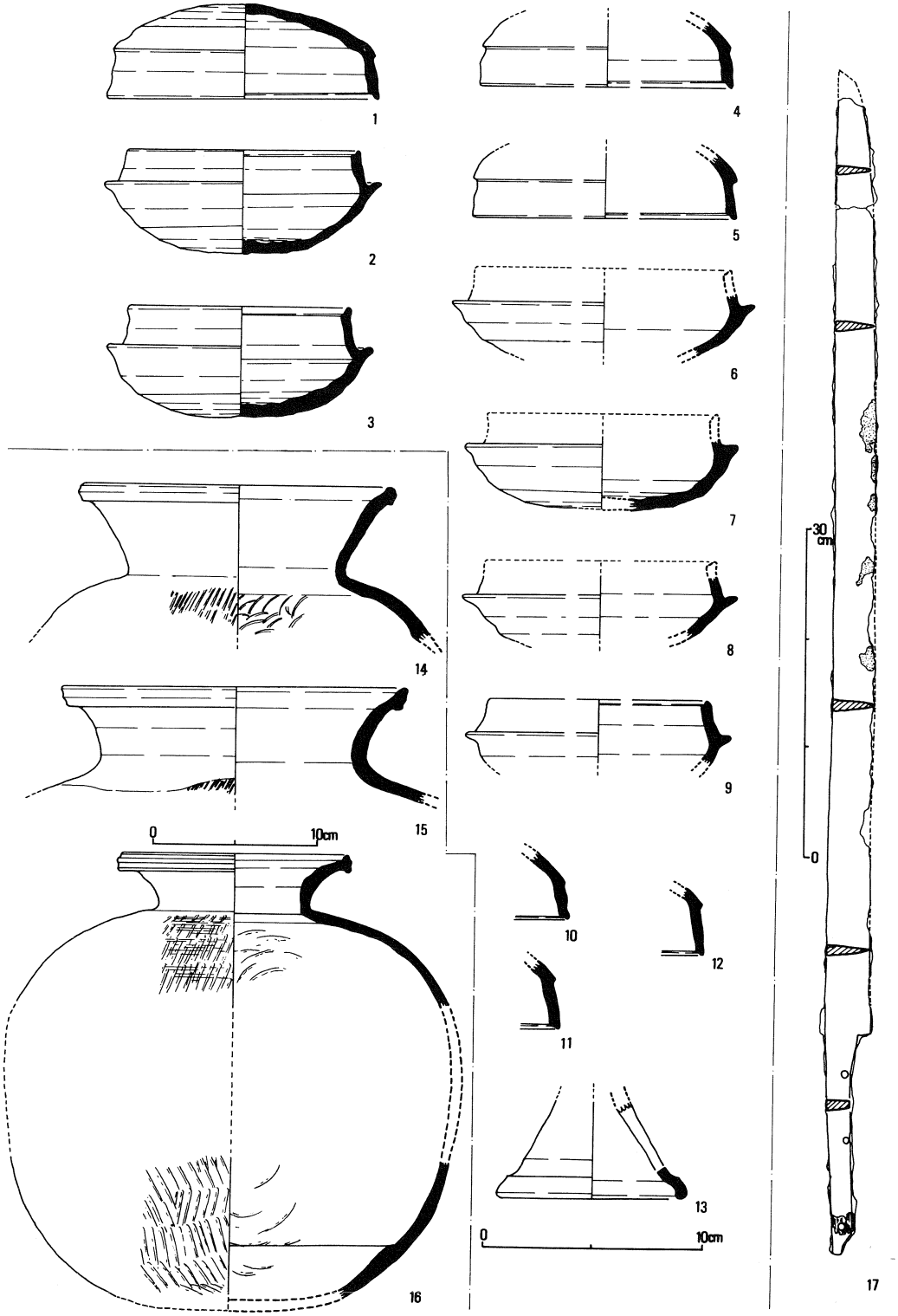


第11図　茶山１号墳２～５主体出土土器（Ｓ＝１：３）

り、かなり急激に内傾してから立ち上がるもの（第12図３）、内部に折れ線を残しているが、緩やかに立ち上がるだけのもの（第11図２－６）、内面に折れ線は認められず、体部と一体化し口縁部に至り、受け部の幅の狭いもの（第11図２－８）等がある。

高杯は２点出土しているが、第11図２－12は深い杯部をもち、その外面にはつまみ出しによる稜線が認められる。脚部はしっかりとし、カキ目調整が施され、スカシ孔が３箇所にあけられている。調整は杯部下半に回転ヘラケズリが認められる。

壺は首が太いもので口縁端部は平坦に仕上げられている。頸部は幅広く、胴部穿孔上位にせまい櫛描き波状文が施されている。



第12図　茶山１号墳出土遺物（１～13；Ｓ＝１：３、14～16；Ｓ＝１：４、17；Ｓ＝１：８）

第12図14～16の甕形土器はいずれも須恵器で、内面は同心円文叩き、外面はタテ方向の叩きによって調整されている。口径は 14.4 ～ 22.0 ㎝と差があるものの、口縁部の形態はいずれも上下に拡張し、端面には 2 条からなるナデの痕跡もしくは凹線文を施している点で共通している。胴部はほぼ球形をしていると思われ、最大径は胴部中央にあると推察される。

第13図17の鉄製大刀は残存長 107 ㎝、推定長 110 ㎝を測る。刃わたり幅は約 4.0 ㎝、厚みは背部で約 1.0 ㎝を測る。柄部には目釘穴がほぼ等間隔で 3 箇所にあけられている。サビ落とし段階で表裏両面にわたって数箇所の布目痕跡が確認できた。これは上下二重になっているものがあり、下が粗い布目痕で、その上が細かいものである。細かい布目痕は絹である加能性が指摘される。また、柄元部には若干の木質が遺存していた。その他、鍔等の付属金具等は検出されなかった。

2　2号墳

調査前の状況

円形の高まりとして確認できた。周溝はほとんど確認できなかったが、わずかに北側に数㎝のおちこみが認められた。南側部分には造り出し様の高まりがみられたが、後世の客土であることが判明した。周辺からは土器・葺石等は検出できなかった。墳頂中央部には盗掘坑があけられていたが、石室を想定させる石等は確認できなかった。

墳丘の形態と規模　（第 4 図）

推定径 8.4 m を測る。やや東西に長い楕円形を呈する円墳である。しかし、西側・南側の墳端は、後世に 2 号墳の墳丘斜面とほぼ同角度で畑地造成のための削平を受けており、現状では不明である。周溝は北側部分にのみ検出された。深さは50～60㎝を測る。幅は旧地表傾斜面で算出すれば、約 2 m で掘り下げたものである。東側には墳端のみ確認できたが、自然傾斜がここでかなり急に落ちこんでいることから、本来周溝はなかったことも推察できる。

墳丘の構造と築造　（第 4 ・ 5 図）

現状での盛土は、頂部にやや平坦面をもつ断面台形に近い形状を呈する。盛土層は数層に分類することが可能であるが、明瞭な層毎の差異は認められなかった。但し、最下層に黒色の旧地表土層が検出されたことから、その上位の盛土層を確認することができた。

盛土の構築方法は次の通り推察される。まず、地表面におおかたの円形プランを想定し、そのほぼ中央に 4.0×0.6m の長方形の中心主体を設定する。その部分をわずかに掘り下げ、シスト様に板石をたて並べ、その周囲から盛土を始めている。その土砂は、北側においては、その周溝を掘り下げることから、東側においては、その周辺を整地することによって得られたものを利用していると考えられる。南側および西側部分はすでに撹乱を受けており不明である。

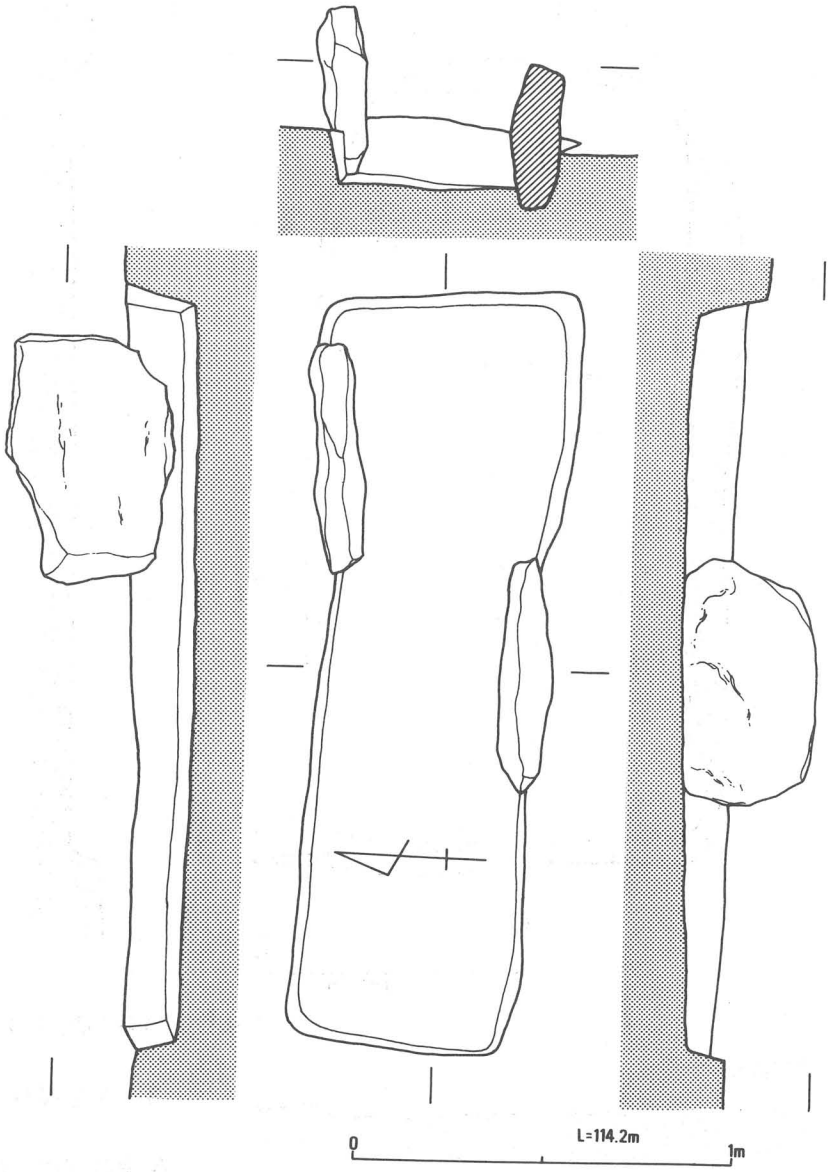
盛土の現状での高さは、旧地表面からは40～60㎝を有する。

中心主体（第13図）

２号墳円丘のほぼ中央に中心主体が検出された。

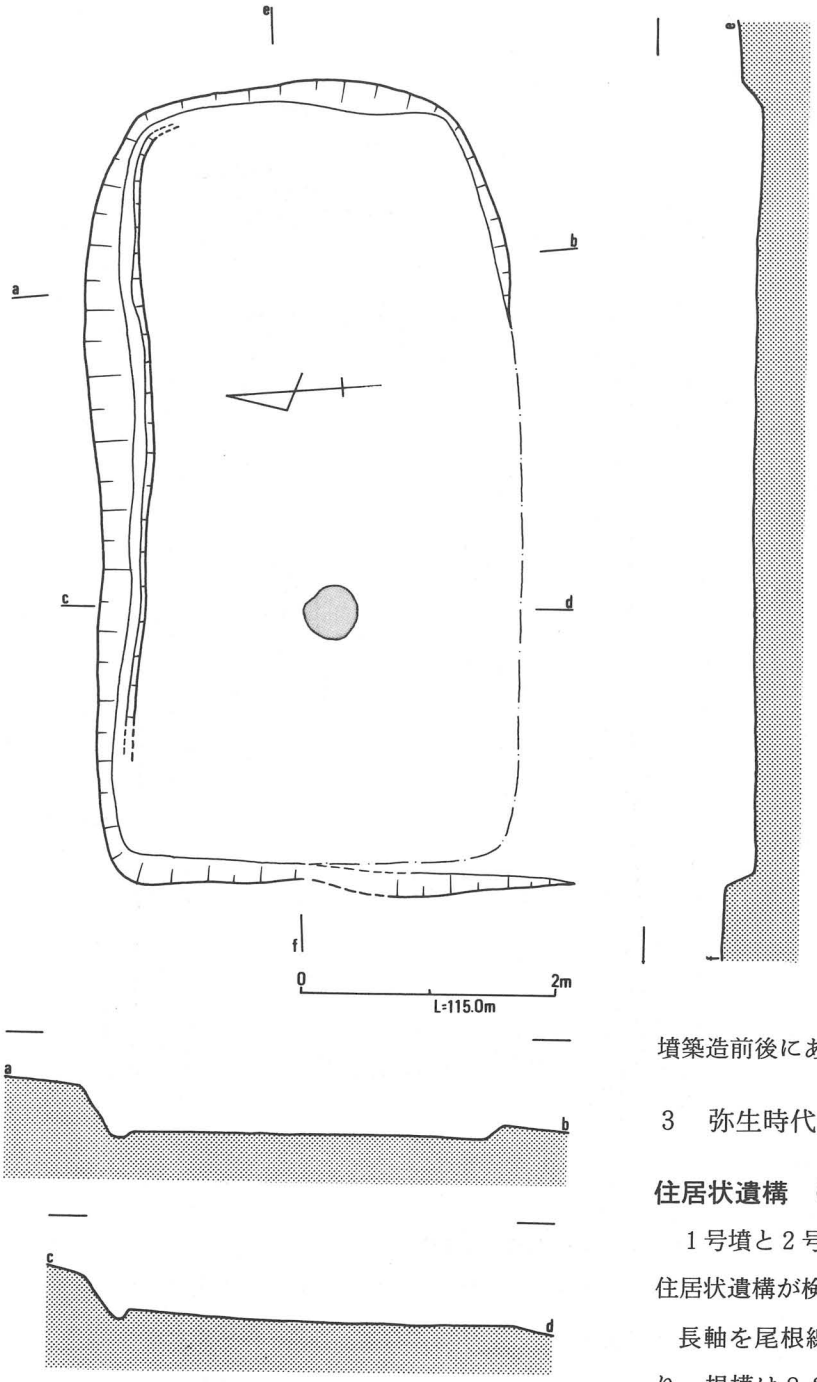
検出状況は40×60㎝大の板石が８枚程盗掘坑及びその周辺から見つかり、うち２枚だけが当時の状況を示す様に立てられていたものである。また、荒らされた６枚の板石の下部より円礫による集石が認められ、床面の可能性が確認できた。しかし、掘り方等は黒色の旧地表面に達して初めて検出された。

規模は２.０×０.６～0.7mを測り、側壁石上部から床面までの深さは約０.５ｍを測る。内部はすでに全面にわたって攪乱を受けており、良好な状態では遺存していなかった。しかし、円礫の集石がかき集められた状態で検出されたことから、本来は礫敷きであったことが推定される。また、現状をとどめていなかった板石のうちの２枚が、現状をとどめている２枚の立石のすぐ外側に横になっていたことから、本来は、板石を２段積み上げた小竪穴式石室様の中心主体であった可能性が指摘される。同一形状の板石が当時使用されたと考えると、中心主体の両側壁には基段に各３枚、上位に各３枚の板石が、小口部には各１枚、上位に各１枚、計16枚の板石が使用されていたものであろう。



第13図　茶山２号墳中心主体図（Ｓ＝１：40）

また、２号墳の中心主体の主軸はＮ－87°－Ｗを指し、１号墳の中心主体の主軸とほぼ平行す



第14図　住居状遺構平・断面図（S＝1：80）

るものである。

中心主体の床面、および埋土中からは時期を確定できる遺物は出土していない。

出土遺物

図示できるものはない。

出土遺物としては、2号墳墳頂周辺及び盛土中から数点の須恵器甕形土器小片が出土したのみである。いずれも内面には同心円文のタタキ目、外面にはタテ方向のタタキ目が認められる。

これのみで時期の確定は不能であるが、その他の状況から、1号墳築造前後にあたるものと考えられる。

3　弥生時代の遺構・遺物

住居状遺構　（第14図）

1号墳と2号墳の中間平坦面に長方形住居状遺構が検出された。

長軸を尾根線に直交して立地しており、規模は8.2×4.4ｍを測る。床面には中央よりやや西側に径約60㎝の不整円形の焼土面が検出された。

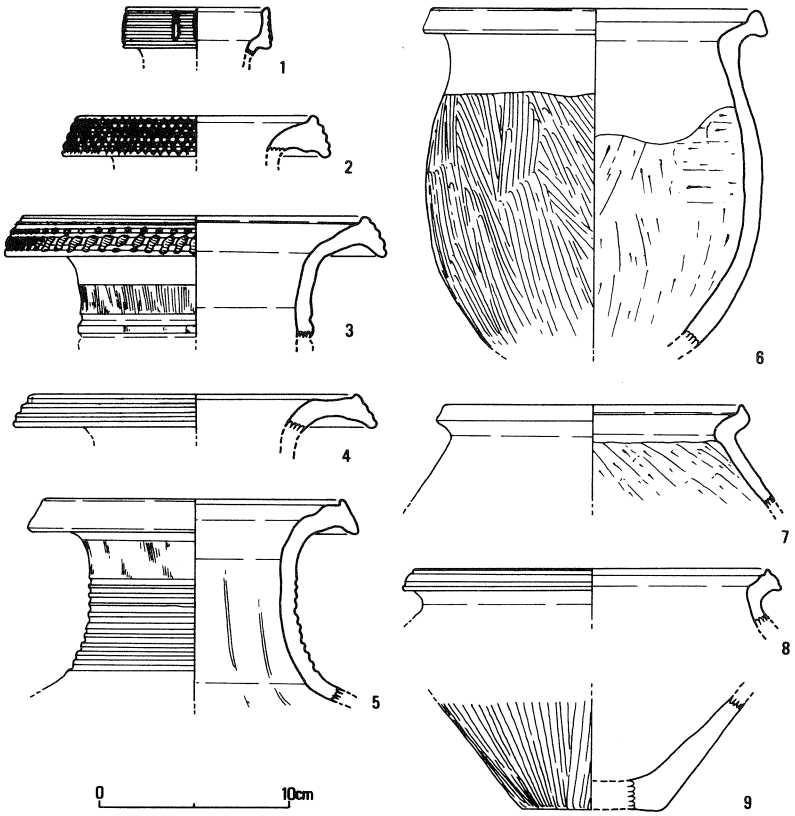
北側の壁体に沿って床面に浅い溝がめぐるが、東西の各側壁体には確認されなかった。また、南東部コーナーには隅丸方形に屈曲する壁体が確認されたが、南西部には認められず、南側壁体部は自然斜面により解消されて、約3分の2は遺存していない。

床面には柱穴等は全く検出されなかった。

住居状遺構出土遺物（第15図）

住居状遺構からは石庖丁１点（第16図14）と数十点の弥生土器が出土した。弥生土器のうち図示できるものは第15図に示した９点である。

1～**5**は壷形土器の口縁部及び頸部片である。**1**はかなり小型で直立するかなり高い口縁部をもつ。外面には数条の沈線文が施され、小破片でありながらも２箇所に棒状浮文の痕跡が認められた。**2**～**5**はやや大きめの壷形土器の口縁部片で、円筒状に直立した頸部から緩やかに外反し、口縁端部に至り上下に拡張を示す。端部はやや内傾し、端面には数条の凹線文を施すものと施さないものとがある。また、凹線文を施した後、格子目状に櫛描き文を入れるものと、斜方向に連続刻目文を入れるものと、全く入れない３者が認められる。頸部の地文はタテ方向のハケ目で、頸部中位から下半にかけて凹線文を施している。頸部内面はナデであり、**5**にはしぼり痕跡が認められる。



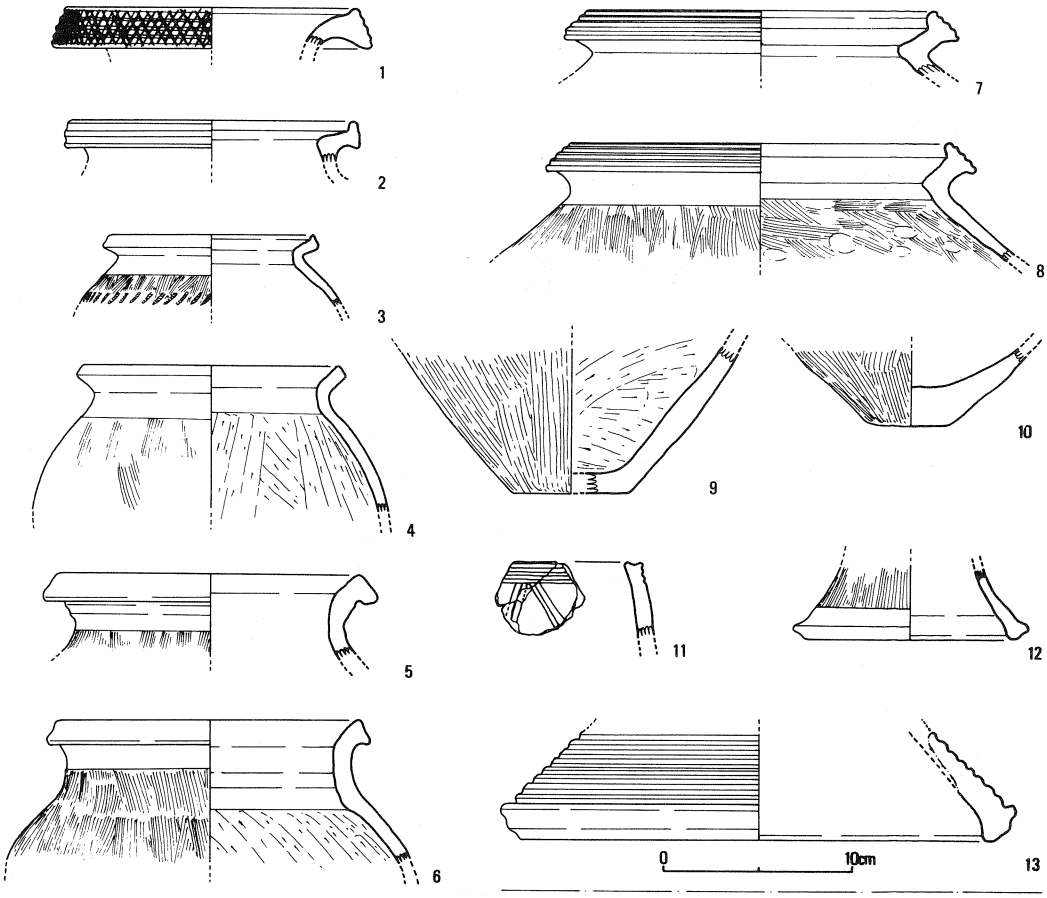
第15図　住居状遺構出土土器（S＝1：4）

6～**8**は甕形土器及びその口縁部である。**6**は胴部最大径をほぼ中位にもち、「く」の字状に外反し、端部を肥厚させたものである。外面の上位５分の１と内面の上位４分の１がヨコナデであるが、その下位は外面がタテ方向のヘラミガキ、内面がヨコとタテ方向のヘラケズリである。**7**は口縁部片であるが、内面には屈曲部附近にまでタテ方向のヘラケズリが及んでいる。

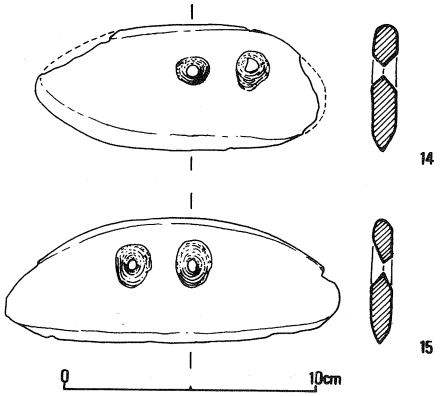
9は壷形土器もしくは甕形土器の底部片であるが、外面にはタテ方向のヘラミガキが認められる。

その他の弥生時代遺物（第16図）

弥生時代の遺物は、１号墳盛土内より石庖丁１（**15**）が出土している。また、２号墳の盛土下位からやや一括した弥生土器が出土しており、遺構検出を試みたが、結局検出できなかった。



第16図　弥生土器と石器(土器；S=1:4、石器;S=1:3)



1・2は壷形土器の口縁部片である。1は住居状遺構より出土した壷形土器（第15図2～5）に類するものである。2は端面に強いナデによる2条の凹線様文が認められ、口縁端部はやや上方に立ち上がる傾向を示している。

3～8は甕形土器の口縁部片である。大きく3者に分類可能である。まずは3でやや小型で口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方にわずかにつまみ上げている。外面はタテハケ地文に、板状工具の小口による連続刺突文が認められる。次に5・6で、胴部からわずかに立ち上がった後更に外反し、口縁端部は下方に拡張する。外面は口縁部以下はタテ方向のハケ目であるが、内面は立ち上がり以下にはタテ方向のヘラケズリが認められる。そして、7・8の様に、胴部最大径からかなり急激に内傾し、鋭角に「く」の字状に短かく外反し、口縁端部は上下に拡張を見せるものである。端面には数条の凹線文が認められる。内外面とも口縁部以下はハケ目調整である。

9・10は壷形土器もしくは甕形土器の底部片である。外面にはタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のヘラケズリが施される。

11・12は高杯形土器の破片である。11は椀形を呈する杯部の口縁部片と思われる。外面にはヨコ方向の凹線文が施され、その下部に3本づつからなる斜方向の櫛描き文が認められる。12は高杯形土器の脚部である。緩やかに外反した脚部は端部でやや肥厚し、外方への拡張を示す。端部および内面はナデ仕上げであるが、外面にタテ方向の細いヘラミガキ様の痕跡が確認された。

13は器台形土器もしくは大型高杯の脚部である。外面には数条の凹線文が確認された。

14・15は白雲母石英片岩製磨製石庖丁である。いずれも両面とも丁寧に研磨されている。穿孔は両面から行なわれている。

4　中世以降の遺構・遺物

中世の遺構

明瞭な遺構は検出されなかった。しかし、茶山1号墳後円部の東側が後世にかなり削平を受けており、埋土中からは多量の土師質椀形土器・小皿形土器、及び鉄釘が出土していることから、この削平面が中世期の何らかの遺構の可能性が指摘される。プランも明瞭ではなく、柱穴等も何ら検出されなかった。また、中世土器の分布の密な場所は、茶山1号墳の南側かつ住居状遺構の北側にもあった。

中世の遺物　（第17図）

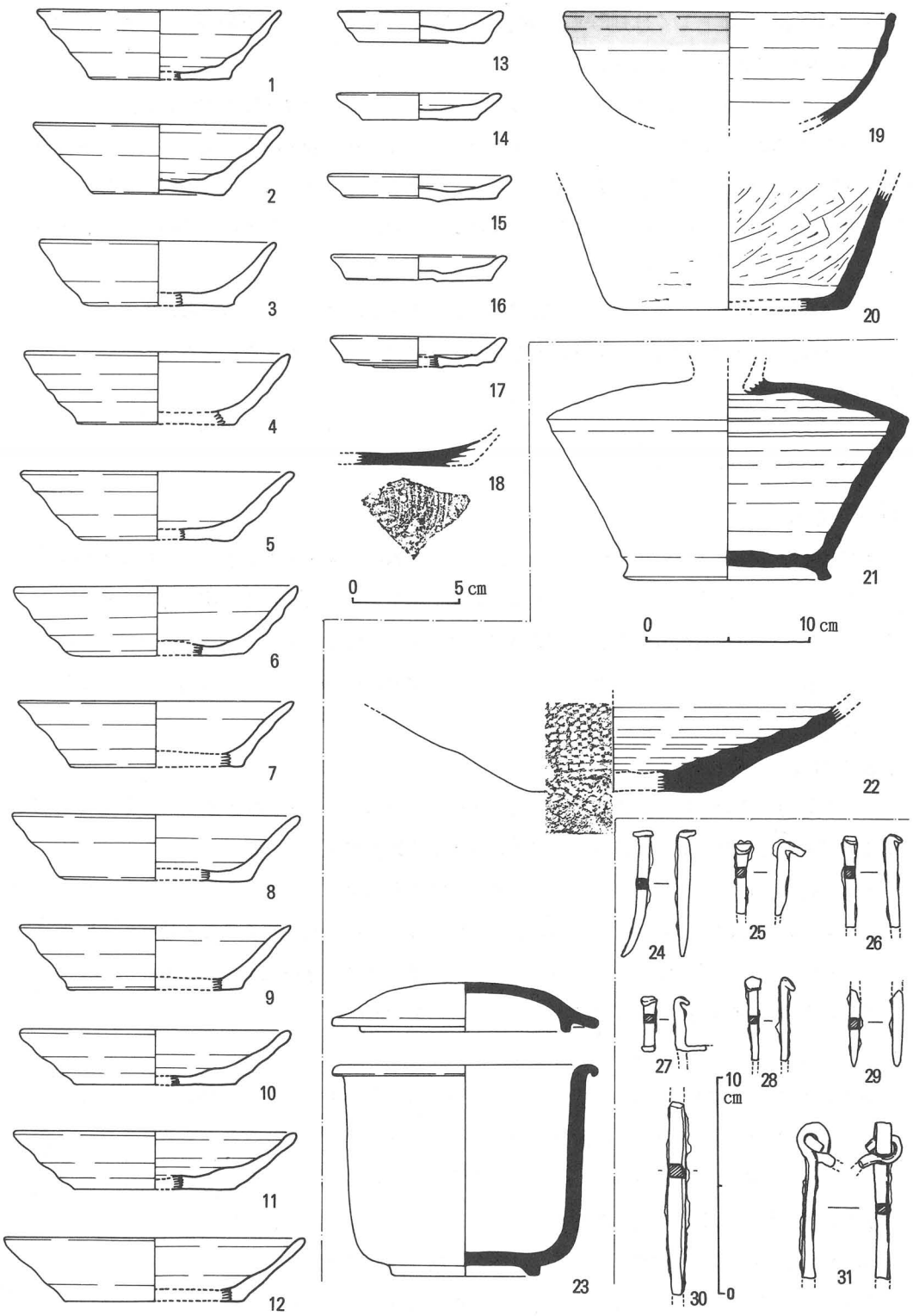
前述の集中箇所を中心に、土師質椀形土器・小皿形土器・須恵質小皿形土器・勝間田焼椀形土器・勝間田焼甕形土器・瓦質鉢形土器・鉄釘・不明鉄器が出土している。

土師質椀形土器（1～12）は、1～3の様に小型で底の深いものと、10～12の様に大型で底の浅いものの2者が認められる。しかし、両者の間に明確な一線を画することは非常に困難であり、その中間形態を示すものも示唆されうる。色調は概して赤橙色を呈し、表面にはミズビキ調整による凹凸が幾条も認められるものが多い。口縁端部は概して丸くもしくは先細りにおさめられており、底部の調整はナデである。

小皿形土器（13～18）には、土師質のもの（13～17）と須恵質のもの（18）の2者が認められる。前者は口径約7.5㎝で、色調は赤橙色を呈し、底部は回転ヘラ切りである。後者は1点のみの出土で詳細は不明であるが、かなり大きい皿形土器になると思われ、前者との相違は、底部が回転糸切りによることである。

19は勝間田焼椀形土器である。口径15.1㎝で、緩やかな半球状の椀形を呈し、口縁端部は丸くおさめている。口縁外面には重ね焼きの際の焼けむらが認められた。

20は瓦質の鉢形土器である。形状は桶形を呈する。内面はヨコからナナメ方向のヘラケズリ



第17図　中世以降の遺物（1～20・24～31；S＝1：3、21～23；S＝1：4）

で、外面はナデであるが、一部砂粒移動の痕跡が認められた。

22は勝間田焼大甕の底部片である。外面には底部に至るまで格子目のタタキ目痕が認められ、内面はミズビキ様のナデである。

24～31は鉄器であり、24～29は鉄釘である。断面は方形を呈しており、頭部は折りまげただけのものである。30・31は不明鉄器である。

近世以降の遺構・遺物

近世もしくはそれ以降の所産と考えられる骨壷が、茶山1号墳前方部で検出されだ'(第3図)。盛土除去中に発見されたものであるが、掘り方内埋土は黒褐色で、しまりがゆるいことから、かなり新しい時代のものであると考えられる。第17図23がそれである。色調は淡桃色を呈する。完形であり、蓋はかぶせられたまま出土している。

その他

21は台付長頸瓶である。鋭角に張った胴部最大径はかなり上位にあり、約22cmを測る。台部は「ハ」の字状にしっかりとつくられている。頸部以上は欠損して不明である。外面はナデにより平滑に仕上げられているが、内面にはミズビキによる顕著なナデの痕跡が認められた。全くの遊離遺物として出土し、古墳等との関連も不明であるため、この項でとりあげたものである。

Ⅳ　ま　　と　　め

1　茶山古墳群の築造時期

茶山1号墳の各主体の造営順序

茶山1号墳からは中心主体を含め5つの主体が検出された。中心主体の他の4つの主体について、その順序を考えてみたいと思う。

土層の切り合いにより確認された順序は第5主体→第3主体だけである。

第2主体と第3主体の関係については、遺物における様相の相異から若干第2主体の方が新しい可能性が指摘される。

第4主体と第5主体においては中心主体と主軸がほぼ平行しており、第2主体・第3主体においては直交する。この差異が埋葬する際の時間的な差異の反映として把える強引な推定を許していただくならば、このことから前者が後者より古いものとの位置づけが示唆される。これは第2主体出土遺物が他の須恵器の中で最も新相に位置すると認められることからも矛盾しないものである。

後述する様に、各主体は出土遺物からみて時期的に差がなく埋葬されているが、ここではまとめとして、中心主体→第4主体もしくは第5主体→第3主体→第2主体の造営順序を消極的ながらも推察しておきたい。

古墳の築造時期

茶山古墳群の築造時期を示す有効な資料に須恵器の杯身・杯蓋がある。

杯身の特徴としては口径12cm前後を測り、器高は比較的高く作られている。立ち上がりはわずかに内傾しながらもほとんどがまっすぐに立ち上がり、端部に段を持つものが多い。杯蓋も器高が高く、口径は約14cmを測る。やはり端部に段を持つものが多い。天井部から口縁部への屈曲部外面には稜を持つ。調整の特徴は外面の約３分の１以上（以下）に回転ヘラケズリが認められる。

しかし、個々をみるとそれぞれに若干の新古相の差異が認められる。たとえば、第２主体の10個の須恵器蓋杯をみても、一括出土でありながらも端部の段が明瞭に認められるものから丸くおさめてしまっているものとそれぞれである。これは、型式的差異として捉えるよりもむしろ個体差として捉えられるものであり、前述のとおり各主体は１型式を越えない範囲でかなり連続的に造営されたものと考えられる。

以上の特徴を陶邑編年に照らし合わせるとＴＫ47（註１）が該当するものと考えられる。絶対年代を当てはめると、６世紀初頭が適当であると考えられる。

２号墳からは時期の明瞭な資料が出土していないが、古墳群の性格から１号墳に相次いで造営されたものと考えられ、時期としてはほぼ同時期と考えてよいと思われる。

周辺古墳との比較材料としては才ノ峪古墳群（註２）のものが挙げられる。須恵器の特徴としては口径、調整及びプロポーションからみるに才ノ峪２号墳のものと同時期と考えられる。中心主体の竪穴式石室の形態も茶山１号墳のものと類似しており、ほぼ同時期に両者が造営されたことが示唆される。

註１　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ｉ平安学園クラブ 1966 年

註２　湊哲夫・中山俊紀『才ノ峪遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』 1985 年
　　中山俊紀『才ノ峪古墳群』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集』 1988 年

2　津山の前方後円墳

津山市内には十数基の前方後円墳が確認されているが、遺物が拾われていたり、中心主体が判明している例は非常に少ない。発掘調査が実施されているのは、保存整備のための美和山古墳群と茶山古墳群の２例のみである。よって本論では前方後円墳の編年的考察や葬制の変化を中心にすることは不可能である。従って、本論では今後の上記のような研究の課題をわずかに指摘することに留めておきたい。

津山市内の前方後円墳を中心とする古墳群は数ケ所の集中地域を形成している。南東部においては佐良山古墳群（註１）がある。その北側の吉井川北岸には美作最大規模の前方後円墳を含む美和山古墳群（註２）が位置する。盆地のほぼ中央部の吉井川北岸には密度は低いが、川

崎玉琳大塚古墳（註３）・正仙塚古墳（註４）の５世紀代の古墳を中心とする、川崎・高野周辺のグループがある。津山盆地の東側に目を向けると綾部・草加部周辺の古墳群の一群がある。しかし、このグループには古墳の数が多いにもかかわらず、前方後円墳がほとんど認められずわずかにその南側に近長四ツ塚古墳群（註５）があるにすぎない。

最も集中度が高いのは茶山古墳群の立地する金井・瓜生原地内である。やや西に離れるが、津山で最古と考えられている日上天王山古墳（註６）を初め、東側に一貫東１号墳（註７）、植木古墳群（註８）、金井古墳群（註９）の主墳としてこの小範囲に大小５基の前方後円(方)が集中する。

概ね５つの集中個所に注目したが、いずれもありかたが異なっていることが指摘される。即ち、金井・瓜生原地内のグループは日上天王山古墳を除きいずれも小規模の前方後円墳で、概ね５世紀末～６世紀初頭の時期の所産の小古墳群を形成している。一方その北東部に位置する綾部・草加部のものには前方後円墳を含まず、いずれもやや新しい古墳が多い。

上記のものが時期を無視して平面的な位置だけで挙げた集中部分であるために、当然当時の様相を的確に表現しているものではない。今後さらに時期的な検討を加え、立体的なグループ分けが肝要である。

それを基本として、前方後円（方）墳を主墳とする古墳群の形成原理や、前方後円墳消滅後の横穴式石室の登場、陶棺の出現についての考察をしてゆく必要がある。

（註１）近藤義郎『佐良山古墳群の研究』津山市1952年。

（註２）『津山の文化財』津山市教育委員会1983年他。

（註３）『津山市文化財調査略報第１集』津山市教育委員会1961年。

（註４）（註２）文献等。

（註５）（註２）文献等。

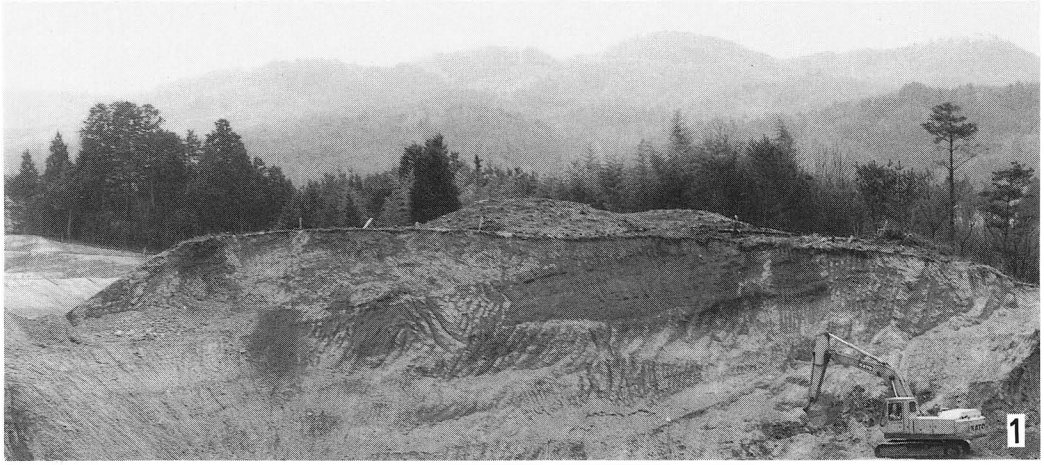
（註６）（註２）文献等。

（註７）1985年、津山市教育委員会が周辺古墳群の発掘調査を実施。前方後円墳の１号墳は現状保存。報告書未刊。

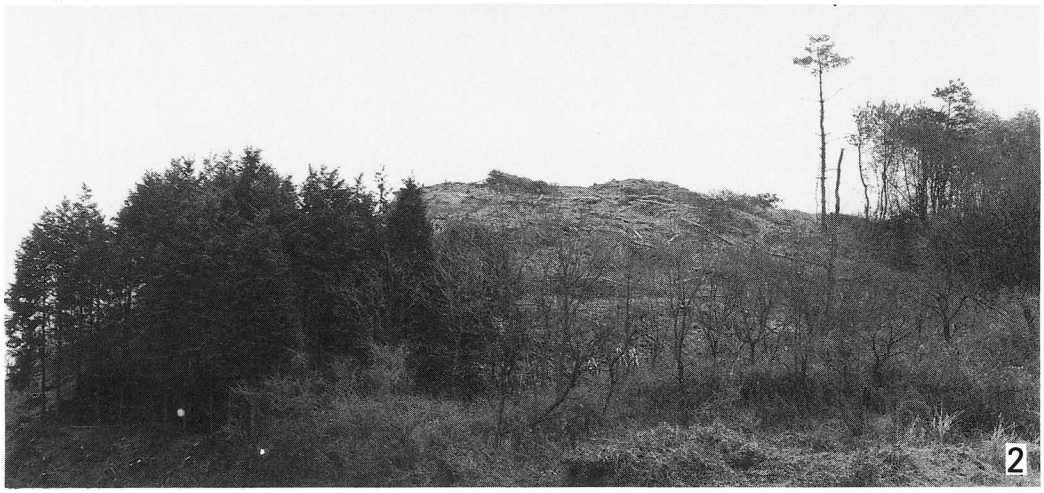
（註８）『岡山県遺跡地図（第１分冊）』岡山県教育委員会1973年。

（註９）（註８）文献等。

図　　版



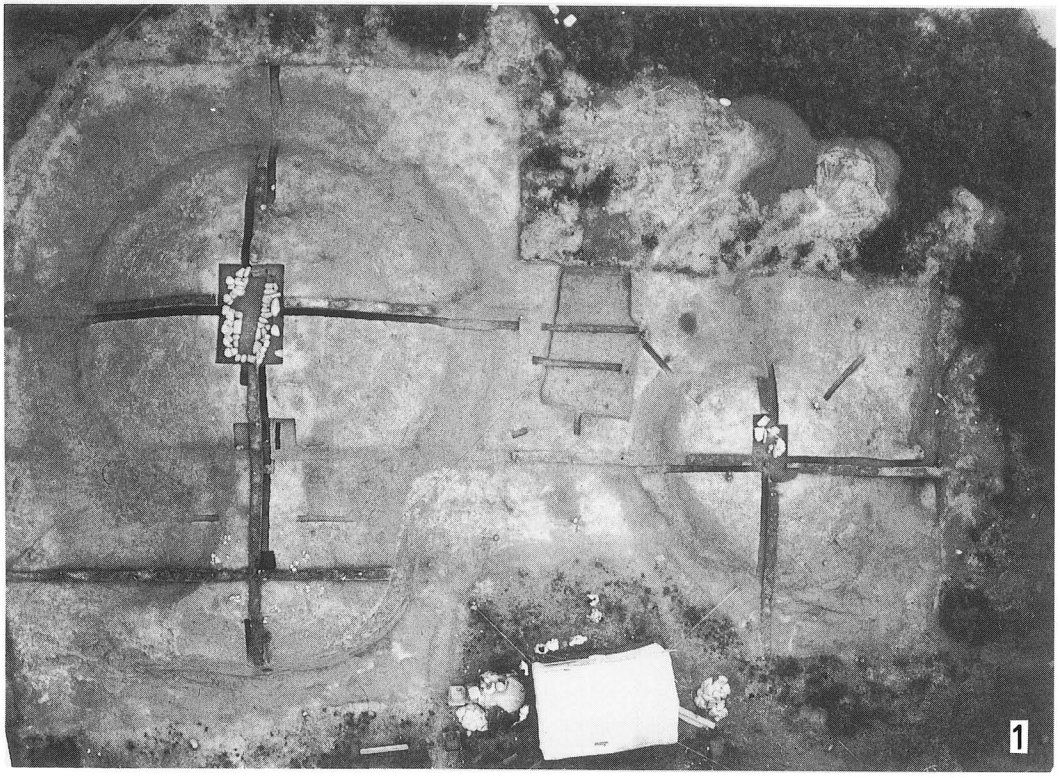
1



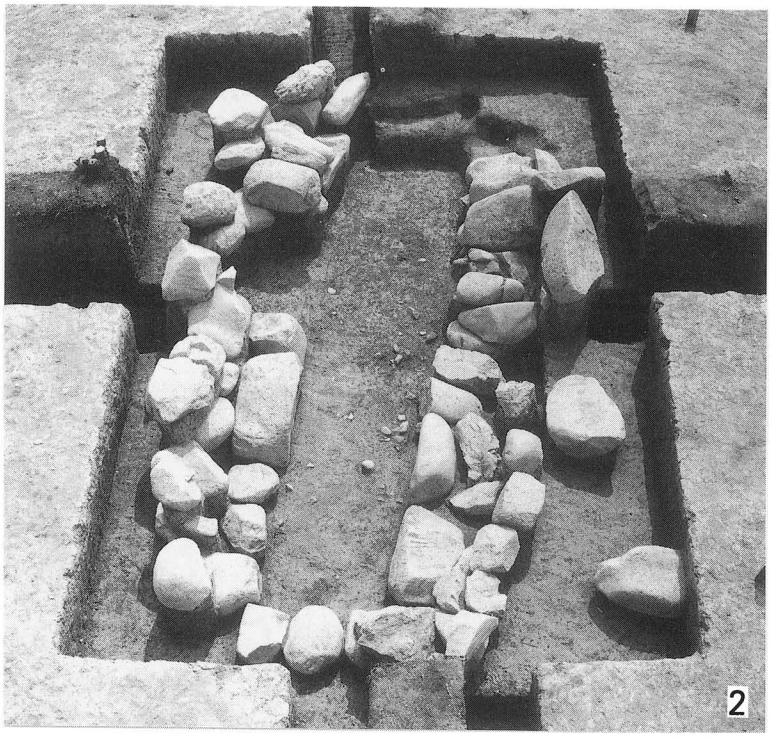
2

1

2



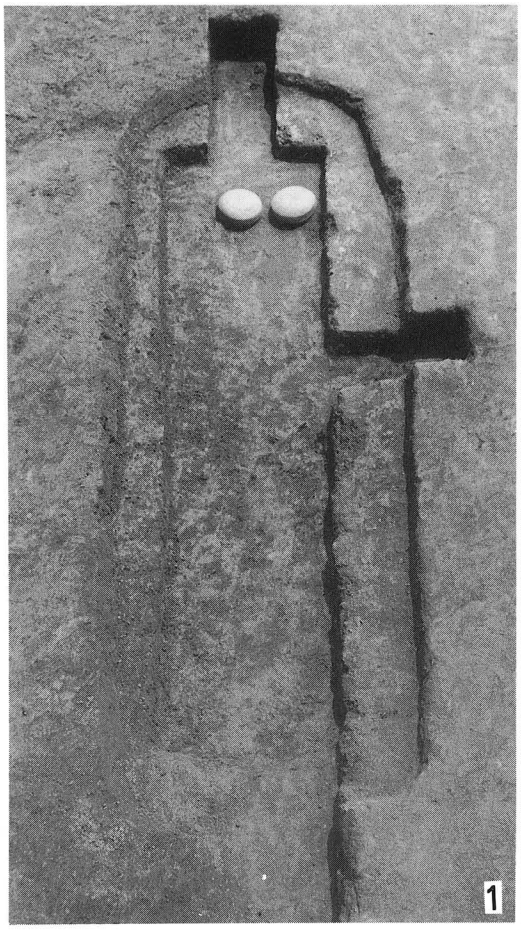
1



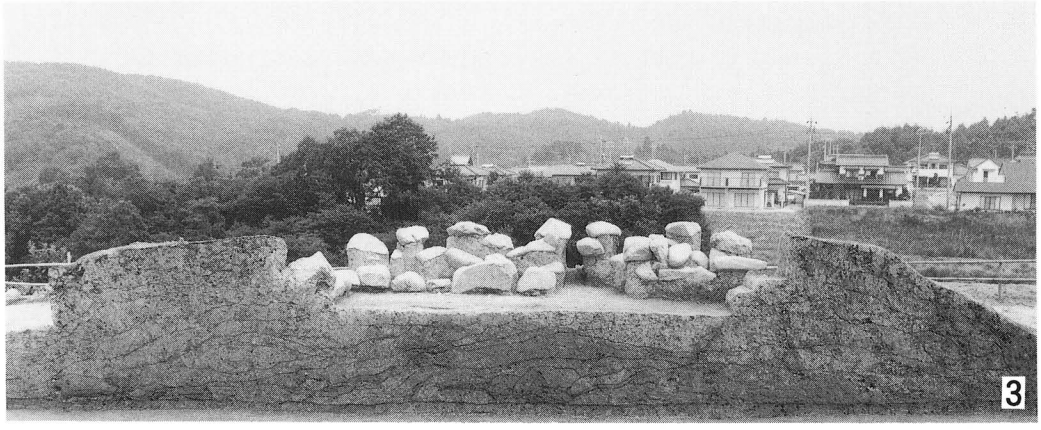
2

1

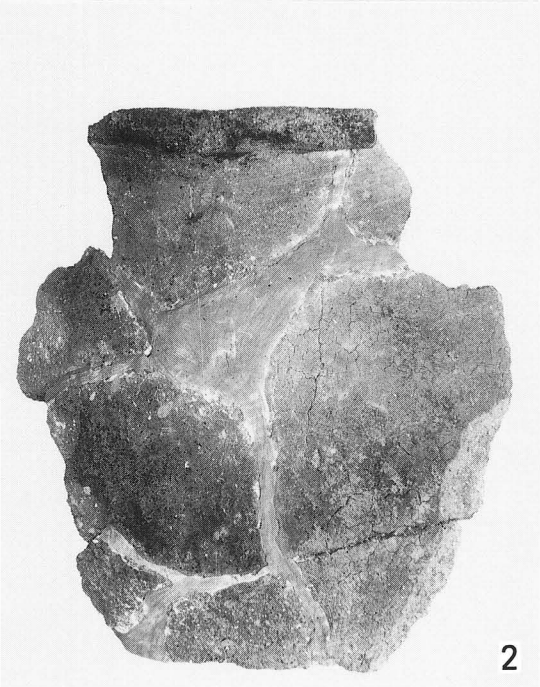
2

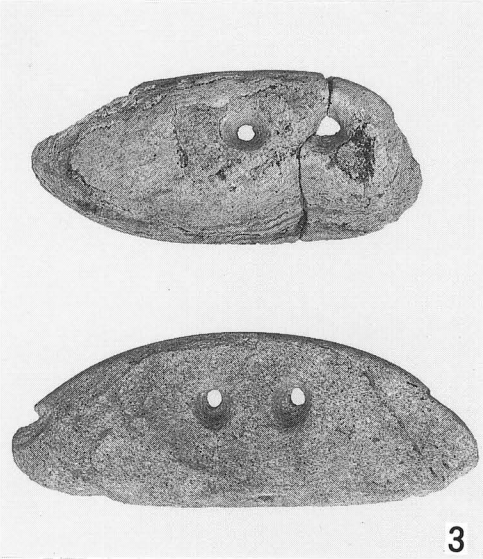

1

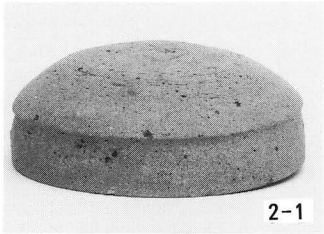
2

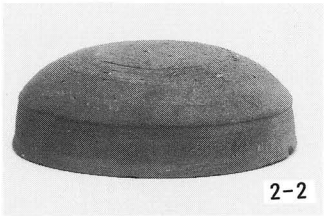

3

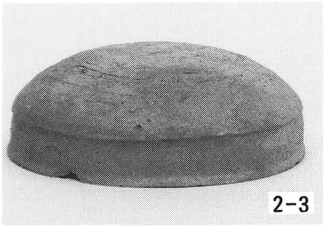
1

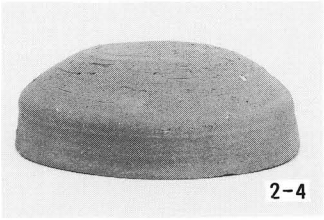

2


3


2-1


2-2


2-3


2-4

2-5

2-6

2-7

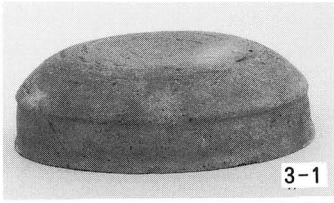
2-8

2-9

2-10

2-11

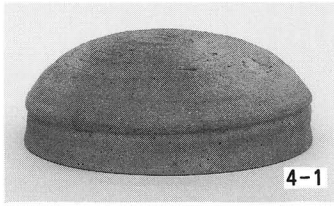
2-12

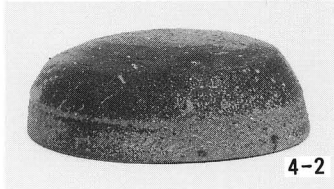

3-1

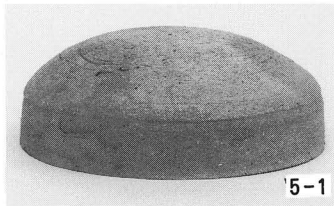
3-2

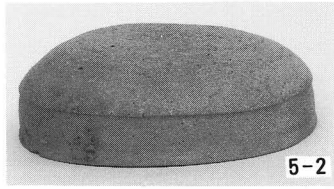
3-3

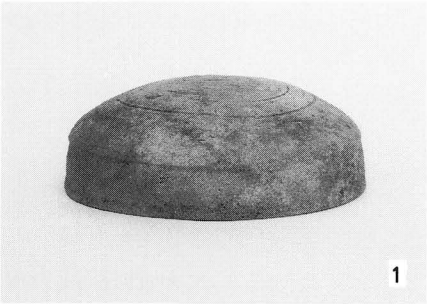
3-4


4-1


4-2

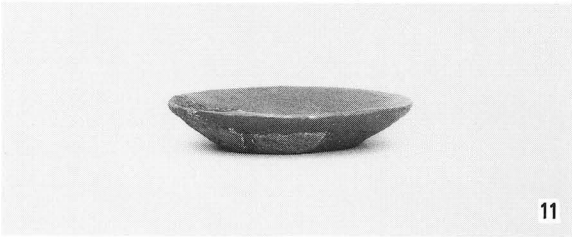

5-1


5-2


1

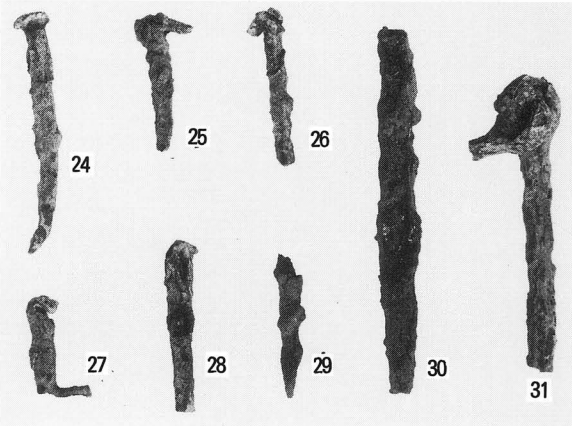
2

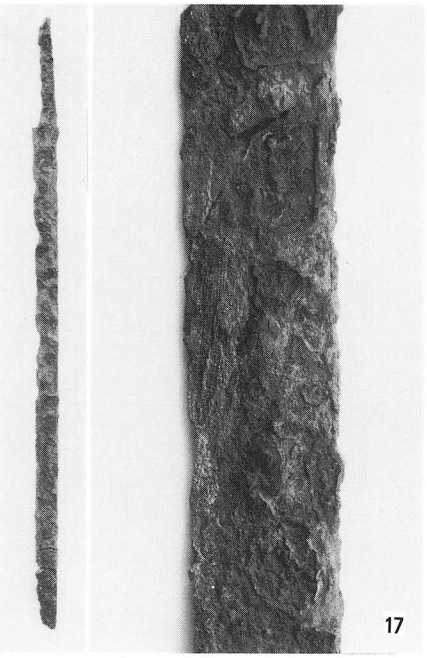
2


11

3

13




17

23

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第27集

茶山古墳群

平成元年１月31日発行

発行　津山市教育委員会
　　岡山県津山市山北520

印刷　松栄印刷株式会社
　　岡山県津山市平福139-3